



写真:矢野津々美

矢口かつ信は、日常における再生や回復をテーマに場所性と呼应する実験的な芸術実践を行ってきた。2008年には、茨城県水戸市に所在する一軒の古民家と出会い、そこを拠点に《祭後の家》と題した作品を発表した。これを機に現代社会において忘れ去られつつある物事や風習、風景などに着目し、任意の場所を起点とする芸術実践を展開してきた。件の古民家は、戦後の焼け野原で家主が廃材を集めて建てたバラックから始まり、曳家や増築を繰り返されてきた物件である。当初は展示終了後に取り壊される予定であったが、家の記憶が呼び起されたことで解体は延期された。その翌年には、かつて小料理屋だった内装をそのままに生かし「小料理喫茶ワシントン」として営業を始める。これと並行して、ローカル新聞(和心団新聞)の発行や小さなお祭り(サントピア通りdeワシントン祭り)の開催など、地域住民や関心を共有する人々との協働を通して様々な社会実践に取り組んできた。2013年には建屋を取り壊すことになったのだが、完全に更地に戻すのではなく、作家自身の手によって建物の記憶や歴史をさかのぼるように解体されていった。この一連のプロセスは、写真や映像によって記録され、「ワシントンドキュメンタリー図」としてまとめられている。なお、解体後も同地を「ワシントン跡地」と名づけ、プロジェクトスペースとして場所の可能性を探求し続けている。また、2016年に「小料理喫茶ワシントン」から徒歩数分の場所にあったファッションビル「サントピア」が解体されることになった際には、工事現場に入り込みいくつかのパフォーマティブなドローイングを展開するとともに《SUNTOPAへ祭後のバーゲンセール》と称した参加型のアートプロジェクトを実施した。このように、矢口の芸術実践は具体的な場所に身を置くことで作家自身(身体)と作家を取り巻く環境(空間)との関係性を拡張するような表現活動を行ってきた。写真、映像、絵画、ドローイング、彫刻、パフォーマンス、インスタレーションと多様な表現手段から構成される。現在は、岩手県奥州市でも複数の拠点を獲得、新たなプロジェクトに着手している。

矢口克信:1978年茨城県生まれ。2002年に渡英。004年にキャンパウェル・カレッジ・オブ・アーツ・ドローイング科修士課程修了。帰国する2008年までロンドン拠点に即興性の高いパフォーマンス作品を精力的に発表。主なパフォーマンスに「Phantom of Tennis」The Washingtoun Site、ワシントン跡地、水戸市、茨城(2016)「The Reason For Madness, Todd Anderson-kunert & Katsunobu Yaguchi」Calm & Punk Gallery、西麻布、東京(2012)「声低く語り、声惹く歌たれ」水戸芸術館ACM劇場、水戸市、茨城(2010)「iPROJECTmyCORKING -sonorous son-」National Review of Live Art、グラスゴウ、イングランド(2007)。主なプロジェクトに「みちのく喫茶ワシントン」奥州市、岩手(2024年-)、「風と俗」金ヶ崎町、岩手(2019年-2022)、「SUNTOPAへ祭後のバーゲンセール」水戸市、茨城、「サントピア通りdeワシントン祭り」水戸市、茨城(2009-2013)。主な個展に「The Progress of The Cafe New Washingtoun」、Keiko Ogane Gallery、水戸市、茨城(2018)「ワシントンドキュメンタリー図」、プリズムセクター、パリ・フォト、グラン・パレ、パリ、フランス(2017)「トマトラベル」、クリテリウム77、水戸芸術館現代美術センター、水戸市(2009)。主なグループ展に「No photography」SageParis、パリ、フランス(2019)「Transit Station」デンマーク王立芸術大学、コペンハーゲン、デンマーク(2010)「Spectre vs. Rector」The Residence、ロンドン、イギリス(2007)「Cross Polly Nation」General Public、ベルリン、ドイツ(2006)などがある。